猪養の山の鹿鳴

――大伴坂上郎女の羨望――

遠藤　宏

万葉集巻八、秋の雑歌に分類されている歌の中に次に掲げる二首がある。

大伴坂上郎女、跡見の田庄にして作る歌二首

妹が目を始見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ（巻八・一五六〇）

吉隠の猪養の山に伏す鹿の妻呼ぶ声を聞くがともしさ（巻八・一五六一）

第一首は、萩の花が「この月ごろ」（作者が跡見の田庄に滞在している期間であろう）は散らずにあってほしいという、美的感傷に基づく作であり、第二首は妻を求める鹿鳴に感興を催している作である。共に秋の代表的な風物を素材として、植物と動物とに歌い分けたもので、少くとも形の上ではきれいに整った作となっている。この二首のうち、第一首には「始見の崎」に関して以外はさして疑問点を見出しえないのだが、第二首に関しては、疑義をおぼえる点がいささか存する。それは従来ほとんど問題視されなかったものであり、小さなことかもしれないのだが、表面に現われて来ていない作者の心情の奥に関わることと思われるので、ここに、その疑点と作者の心底を述べてみたい。ただ、紙数の関係上、概略を記すにとどまる。

最初に感じる疑問は、何故作者は鹿の鳴声を「ともし」と聞いたのかということなのだが、その点を考える前に、なお問題となる点を検討しておく必要がある。

問題となる第一点は、作者の居る歌詠の地である跡見の田庄から猪養の山の鹿の声が果して聞こえるのかという点である。跡見の田庄も猪養の山もその所在に関しては正確な位置が明かにされていないので、右の疑点に対する適確な解答は示し得ないことになるのだが、跡見の田庄が現在の桜井市外山付近、猪養の山が桜井市吉隠の志貴皇子妃陵あたりだと仮定すると、その間約四キロメートルあり、鹿の声を聞くことはむずかしいのではないか。もっとも、夜間の静寂の中の声であるから、この程度の距離はものともしないかもしれない。仮りに聞こえても（聞こえない距離ならなおのこと）、次のような不審点が生じてくる。

第二の疑点は、ある程度以上の距離のあるところからの声を、どのような根拠で猪養の山から発せられたものと断定したのだろうかという点である。吉隠の中の小地名である猪

養の山というかなり限定された地名を声の発進源の地として確認するのは距離的に困難だったのではないかと思われる。猪養の山の方向からというのであれば判断は可能であったかもしれない。しかしそれでも、正確を期するとしたら吉隠までにとどめておくのが妥当だったであろう。

このように追ってくると、作者が鹿鳴の聞こえてくる場所を猪養の山と断じている根拠には、かなり主観的なものが働いていたのではないかと考えられてくる。その主観的なものとは、恣意的な、猪養でも他のどこでもよいというのではない、猪養でなければならなかった作者の関心の的になっているところということである。そこで、作者坂上郎女にとっての猪養という地のもつ意味が問われなければならなくなる。

この問題を考える前に、先に述べた、作者は何故に鹿鳴を「ともし」と聞いたのかという点について触れておきたい。「ともし」は羨しいの意と見てよいと思われるが、鹿が妻を求めて鳴くのを羨しいと思うのには作者の作歌時の夫との関係が反映していると判断される。この作は巻八の秋雑歌の配列に基づくと、天平四、五年ごろから天平八年九月以前の間のものと考えられる。この頃、最初の夫であった穂積皇子は既に亡く、妻問いを受けた藤原麻呂との間も絶え、二番目の夫大伴宿奈麻呂も没していたと想定される。すると、作者を求める異性が今はいないというのが羨しいと感じた因になっていると思われる。その異性は穂積皇子か藤原麻呂か大伴宿奈麻呂か、このままでは判断つけかねる。そこで改めて猪養の地に目を向けることが必要となってくるのである。

万葉集中、猪養という地名は当該歌に見える以外は、穂積皇子の作に見えるのみである。

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに（巻二・二〇三）

雪の日、但馬皇女の墓を望んで悲傷流涕しての作と題詞にいうこの歌には、穂積皇子の但馬皇女に対するなまなかならぬ恋情が歌われているのだが、この歌の作者が坂上郎女の最初の夫であった。坂上郎女の作以前には猪養という土地は穂積皇子の作にしか見られないという点を重視すれば、坂上郎女は猪養の山で鳴く鹿に穂積皇子を重ね合わせていたのではないかと思われてくる。吉隠の方向から聞こえてくる（あるいは聞こえなかったかもしれず、心眼ならぬ心耳が捉えた声だったかもしれない）求愛の鹿鳴に触発された坂上郎女の触覚が鋭く動いて、猪養と穂積皇子とを瞬時に重ね合わせた結果、羨しいと表現させたのではないか。猪養の山の穂積皇子が求めているのは坂上郎女ではない。但馬皇女のはずである。「ともし」の奥には但馬皇女に対する羨望・嫉妬が存したことであろう。坂上郎女は穂積皇子から類なき寵愛を受けたという（巻四・五二八左注）。が、寵愛の奥に潜む但馬皇女の蔭を鋭敏な坂上郎女の神経が初婚当時既に嗅ぎとっていたのかもしれない。羨望はその頃に源を発していたのではなかったか。

注　本歌の猪養と穂積皇子とが関わることに言及した論としては、赤羽学氏の「『万葉集』巻八・一五六〇「始見之崎の訓み方と穂積皇子と坂上郎女の相聞の可能性」（『岡山大学文学部紀要』五号　昭和五九年一二月）がある。